

『敗戦真相記』を読む/敗因-2「慢心」

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパートも残り14回。「軍事学/地政学」シリーズの4回目は、『敗戦真相記』にある太平洋戦争の重大な「敗因」の二つ目、「慢心」がテーマ。今回はそれによる「情報」の収集、分析の不足や偏りと、その悲惨な結果を踏まえ、私たちのマネジメントへの教訓を考えます。

その1: 第二の敗因「慢心」

永野氏が指摘する第二の敗因は「慢心」。具体的には、「日本の軍部が自己の力を計らず、敵の力を研究せず、ただ自己の精神力を過大評価して、これに慢心したこと」です。氏は続いて、「もう少し敵の力を研究していれば、戦争に突入することはなかったであろう」と述べています。

実際、氏が挙げた例は氷山の一角で、「情報」に関する英米との差は、「質量」共に歴然。それは対ソ連においても同様で、むしろそれが第一の敗因、「公明正大な目標」の欠如を招いたともいえます。

その2: 情報不足の「基因」

さて上記のさまざまな原因を辿っていくと、その大半は日露戦争(1904~05)に行き着きます。また続く第一次世界大戦(1914~18)で得た桁外れの漁夫の利が、そこで芽生えた「慢心」を増長し、後の進路を大きく誤らせることになりました。

その日露戦争を近代戦の先駆けとして注目しながら、「世界大戦」という想定外の泥沼にはまってしまった欧州諸国。一方、日英同盟にかこつけ参戦した海軍はともかく、陸軍や我が国民の大半にとって、それは「対岸の火事」にすぎませんでした。

またその約20年後に起きた第二次世界大戦は、先の大戦の怨念を晴らす復讐戦。いつの世も「軍人はひとつ前の戦争を戦う」宿命がありますが、欧米勢にとって、それは第一次世界大戦。しかし「他人事」だった我が国の場合は、「ひとつ前」が日露戦争でした。実際、我が父が満州に携行した三八式歩兵銃(明治38年生)は、その名残だったのです。

設備や在庫に「もったいない」精神を発揮し過ぎ、骨董のような武器で自動小銃や機関銃に立ち向かった先人たちの思うと、胸が痛むだけでなく、当時の軍幹部に怒りを覚えます。そして同じような誤りを二度と繰り返さないために、その「教訓」を私たちが次代に語り継ぐ責任を痛感します。

参照 『三々な経営』

3-14~17 「イノベーション」の壁①~④

参照「四字熟語」で考える経営戦略

Y-02~03 「外部環境」を考える

Y-04~05 「内部環境」を考える

YF-10 付録「情報」

その3: 「情報」に関する「教訓」

さてその責任を果たすためには、まず何をにおいても、さまざまな「情報」の正確かつ具体的な「記録」に努めなければなりません。またその偏った「分析」や「解釈」を防ぐためには、「マイナス情報」も欠かせません。因みに「二百三高地」の作戦と並び日露戦争の戦史から落とされた「弱み」の一つは、陸軍兵士の「精神力」。それらは兵器や食料の不利、不足を補うため、後にあえて逆利用され、永野氏の言う「過大評価」に至ってしまったのです。

また写真や映像から読み取りにくい、当時の社会的な「背景」や「気風」などの「情報」も同様。例えば、国際法をかなり意識していた日露戦争当時の和歌からは、後の「捕虜の汚名」など存在しなかったことが窺えます。太平洋戦争における戦死の実態(餓死、病死が過半)を思うとき、その改悪の過程や原因を確認しない訳にはいきません。

さて最後は、戦後明らかになった開戦前の資料から。そこでは永野氏の予想と異なり、一定水準の「情報」に基づいていくつかの模擬戦が行われ、その予測がほぼ正確だったことが確認できます。

以上から見えるのは、「彼を知り己を知れば、百戦して殆うからず」という常識を個々には弁えながら、集団としての意思決定を誤ったという事実。それは氏がいう第三の敗戦要因、「指導者たちの独善」の考察へと私たちを導きます。(次号へ！)

2022年10月10日 実空